

オンライン断酒会の効果と課題：参加者へのインタビューを通して

○伊藤美称（精神保健福祉士）¹⁾ 菊地俊一（作業療法士）¹⁾ 神廣憲記（医師）²⁾

医療法人耕仁会札幌太田病院 1)1階デイナイトケア 2) 医局

【はじめに】

新型コロナウイルスの感染拡大によりアルコール依存症患者が体験談を共有する断酒会の開催が制約される中、当院はオンライン断酒会を開催している。オンライン環境での断酒会は参加者にどのような経験をもたらしているのかを検証する目的で研究を行った。

【方法】

質的研究。2020年12月～2021年8月の期間に当院主催のオンライン断酒会参加者に研究参加を呼びかけ、研究者から説明後に参加同意を得られた1名へ半構造化インタビューを行った。インタビューはICレコーダーで録音し、研究者が書き起こした。質的データ分析手法であるSteps for Coding and Theorization(SCAT)を用いて分析を行った。

【結果】

参加者は、オンライン断酒会への参加前には、[オンライン・コミュニケーションの特殊性への不安・疑問]を感じていたと語った。実際に行うと、[オンライン開催だからこそそのメリット(だらだらしないで語り合える/感染リスク軽減/遠方参加者とも交流できる)]があり、[オンライン開催でも対面開催と同じように気持ちが伝わる]と感じたと語った。また、参加者は[顔が見えない寂しさ、回線が途切るために会話のスムーズさに欠ける]といったデメリットを指摘した。

【考察】

参加者がオンライン断酒会開催前に感じていたオンライン・コミュニケーションへの不安は、主にSkypeなどのオンライン・コミュニケーション・ツールに不慣れであったことに起因するのではないかと考えられる。自助グループとは共通の体験をもった当事者同士がミーティングで自らの体験を語り合い体験をお互いに共有し分かち合うことによって、自己の回復を目指していくグループである。オンライン画面を通し、語り口調、目線・表情・参加態度から気持ちは伝わるため、オンライン断酒会であっても互いに体験を共有し気持ちを分かち合い、自分を見出し自己の回復につながることが期待される。時間配分に関しては、オンラインになったことでパソコン画面前に座り講話形式となり、持ち時間に対する意識が変化し、短縮化されたのではないかと考えられる。回線の途切れについては、通信環境を整備し、他者発言時にマイクオフにするルールを徹底することで改善が見込めると考える。遠方の地域に居住している事で断酒会の開催がない場合や自宅から外出が困難な状況でも、オンラインの環境があれば、参加できる可能性があり、さらに移動時間や交通費がかからなく、時間の有効活用や経済的な負担減などメリットが生まれてくるのではないかと考えられる。